

庄内遺跡第5次発掘調査現地公開資料

豊中市教育委員会事務局
公益財団法人大阪府文化財センター

令和3年3月28日(日)

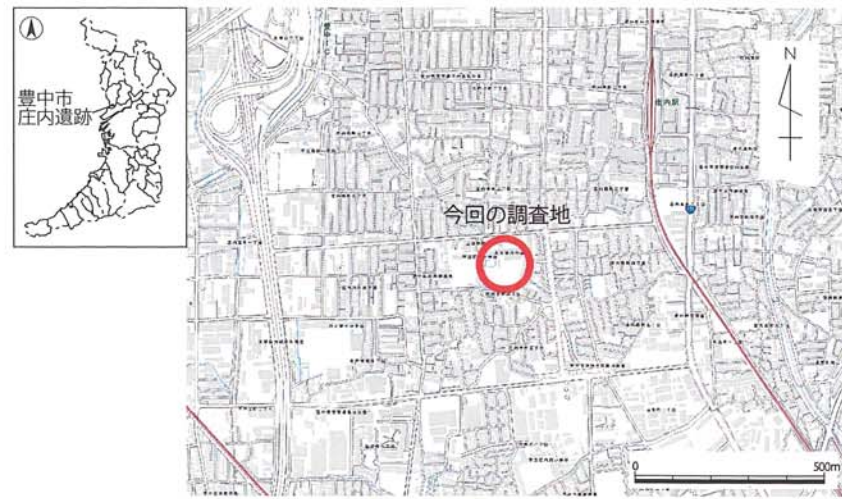


図1 調査地位置図

庄内遺跡は、豊中市の南部に位置し、神崎川河口付近の沖積地に立地する弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、昭和2(1927)年に庄内尋常高等小学校の校舎を新築する際に発見されました。その時見つかった土器には、弥生時代から古墳時代へと移行する時期のものが含まれており、出土地の地名から「庄内式土器」と命名され、古墳時代の始まりを明らかにするための重要な土器として位置づけられています。

庄内遺跡は、これまで4次にわたって発掘調査が行われてきましたが、いずれも小規模な調査であったこともあり、遺跡の実態を明らかにすることはできませんでした。

今回、令和2年9月から(仮称)庄内さくら学園整備事業に伴って、豊中市教育委員会事務局と大阪府文化財センターが共同で発掘調査を行ってきましたが、これまでに、弥生時代中期から近世にかけての遺構や遺物が数多く見つかりました。

弥生時代中期から古墳時代前期

当概期の遺構は少なく、弥生時代中期後半の流路や、後期の土坑や溝、古墳時代前期の船材を組み合わせて井戸枠にした井戸が見つかりました。

古墳時代中期

一方、古墳時代中期になると、この場所は大きく開発が進むようで、竪穴建物(2軒)や掘立柱建物(3棟)、溝が見つかりました。

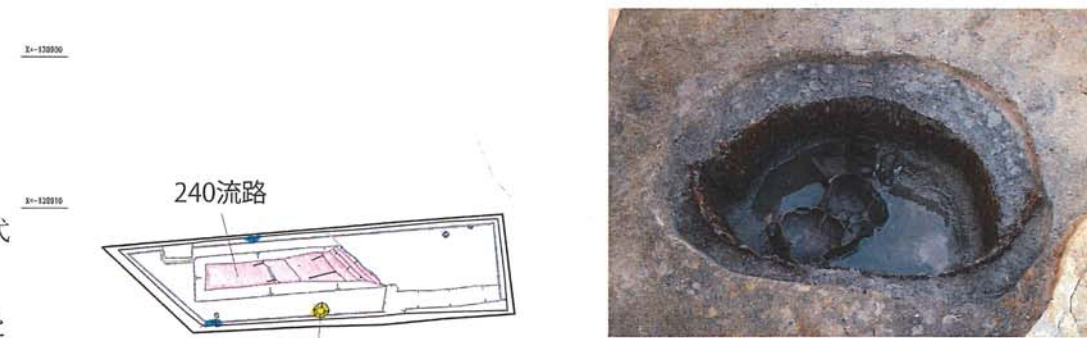
竪穴建物1は一辺3.1×2.6mの方形で、柱穴や壁溝はありませんでしたが、建物の南東隅には排水溝を備えていました。建物の中からは、土師器や須恵器、さらに塩づくりに使われた製塩土器などが出土しました。

竪穴建物2は北半部が失われていましたが、一辺2.8mの方形で、竪穴建物1と同じく柱穴も壁溝もありませんでした。この建物からも製塩土器が出土しています。

掘立柱建物は3棟が近接して建てられていました。建物のうち西側の1棟は2間×4間の側柱建物で、東側の2棟は倉庫と考えられる2間×2間の総柱建物でした。

溝は、A区では北西から南東方向に、C区では緩やかな弧を描きながら南北方向に流れるものが多く見つかりました。遺構面の標高が0.6~0.9mと低いことから、溜まりやすい水を排水して土地を利用しやすくするために掘られたものと推察されます。

古墳時代中期の遺物として、須恵器や土師器、製塩土器のほかに、土錘(網のおもり)も出土していることから、この集落は塩づくりや漁労にたずさわる海浜部のムラとしての性格を垣間見ることができます。



▲ C区 94井戸 (南から)

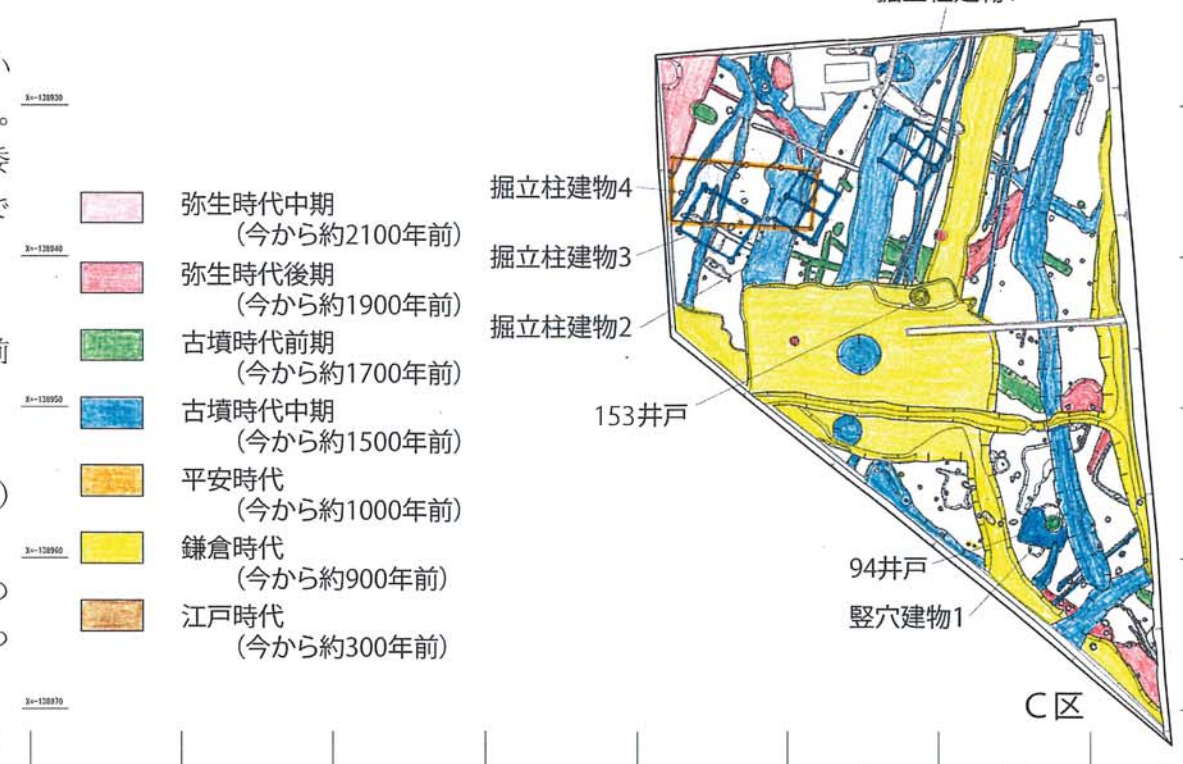


図2 遺構平面図

- 弥生時代中期 (今から約2100年前)
- 弥生時代後期 (今から約1900年前)
- 古墳時代前期 (今から約1700年前)
- 古墳時代中期 (今から約1500年前)
- 平安時代 (今から約1000年前)
- 鎌倉時代 (今から約900年前)
- 江戸時代 (今から約300年前)

江戸時代

A区で江戸時代に掘られた溝を2条検出しました。287溝は北から流れて調査区南端付近で南西方向に屈曲します。溝の規模は幅約6m、深さ約1.5mを測ります。286溝は287溝の屈曲部から東に分岐して、約23m先で収束します。溝の幅は6m以上、深さは1.4mを測ります。2条の溝は用排水路としてだけでなく、水運にも利用されていたと推察されます。この2条の溝は改修されながら近年まで存続していましたが、敷地部分については中学校建設時に埋め立てられました。



▲ A区東半部 全景 (西から)



▲ A区 竪穴建物2 (北東から)



▲ C区 竪穴建物1 (南から)



▲ C区 掘立柱建物1~4 (南から)